



知の 考現学



川崎ゆきお

「本当に見てきたものって、意外と少ないですねえ」

「何の話ですか」

「まあ、見聞のようなものです。また知っていることです」

「ほう、また、曖昧な」

「テレビニュースがありますねえ。あそこで起こっている事件なり、事柄なんて、殆どの人は見
ていないですよ」

「ニュースを見ない。テレビも新聞も見ないという意味ですか」

「いえ、実際には見ていない」

「ああ、それは当事者や関係者でないと無理ですよ。つまり、あなたは体験していないとだめ
って、言いたいのですか」

「そうじゃありません。そこまで飛びません。少し気になりましてねえ」

「ほう」

「よく考えると、自分で見聞したことなど少ないなあと思います。テレビで見たとか、本で読ん
だとか、人から聞いたとか。そういうのが殆どです。実体験が良いという意味じゃなく、実体験
できることなんて、僅かだなあと感じたのですよ」

「また、何を改まって」

「退職後、私はもう仕事はしていませんが、その分野ではいろいろな体験があり、よく知ってい
ます。これは本物です。ただ、本当のことかどうかは分かりませんが、現場で感じたことは事実
です」

「それは、ふつう、よくある話ですよ」

「それで、今は家でゴロゴロしているのですが、実体のない事柄ばかりに触れることが多くなり
ました。まあ、テレビばかり見ているからでしょうねえ。本もよく読んでいます。それで以前よ
りも、より世間のことがよく分かるようになりました。国会中継なんて、働いているときなんて
見られなかった。今は暇なので、ずっと見えていますよ。それで政治家の名と顔がやっと一致した
。有名な人じゃなく、知らなかった人もね。しかし、それって本当に知ったことになるのでし
ょうかねえ」

「知るという深さにもよりますよ」

「そうですねえ。顔を知っている程度の知るもありますねえ」

「それが何か」

「海外ニュースや、海外の天気予報なんかも見えています。行くことがない海外ですよ。その天
気を知ってどうするのかと思います」

「それは娯楽のようなものでしょ」

「はあ」

「本当に知っているかどうかよりも、そういうのに興味があるのなら、それは読み物のようなもの
ですよ」

「フィクションじゃないですよ」

「それは分かっています。実際にあつたことなのでしょうが、距離がかなりありますよ。まあ海

外が遠いという意味じゃなく、他人の見聞を聞くようなものですからねえ」

「でも、それは本当にあったことなんでしょ」

「嘘をわざわざ言う人もいますがね。まあ、そういう大きな話ではなく、家でゴロゴロしていると、実感のあるものって、身の回りのものや、散歩に出たときの周辺ぐらいです」

「そこに知った顔がいますか」

「はい、います。幼友達とか」

「それは知っていても、上辺じゃないのですか」

「ああ」

「本当に、その幼友達のこと、どの程度知ってますか」

「ああ」

「だから、自分で見たことでも、それほど知っているわけじゃないことも多いはずですよ」

「それに」

「はい、何ですか」

「肝心の自分自身についても知らなかったりしますよ」

「それは恐ろしい」

「そうですね」

「そっちの方面の話はどうも」

「知りたいという動機があるのですよ」

「ほう」

「だから、知る必要のないことは、動機がないからです」

「動機ですか」

「まあ、必要な情報以外に、好奇心や興味のようなものですねえ。それは外にあるようで、実は中にあるのです」

「また、難しい話を」

「知る尺度を考えるのも、その一例です。なぜあなたはそう思ったかです」

「ああ、この話はもういいです」

「あまり精度を上げすぎると、怖いことになります」

「はい、心配症になってしまいます」

「はい、お大事に」

了